

# グローバル時代の家庭教育

## 第31回大会報告

日本家庭教育学会

会長 中田 雅敏

- 第31回大会を平成28年8月20日(土)、貞静学園短期大学にて開催した。
- 大会テーマは、「グローバル時代の家庭教育」。  
グローバルな人材育成の重要性が叫ばれる今日、その人材の育成を家庭教育としてどう捉えるべきか考える機会とした。
- 午前の部では、中田会長による開会式の後、12名の研究者・実践者による個人研究発表を、3会場に分けて行った。
- 午後は、グローバル人材育成の第一人者の渥美育子氏(グローバル教育研究所理事長)を迎へ、グローバリゼーションの本質とこれからの家庭教育のあり方につき講演が行われた。
- 丸山敏秋副会長の司会で、明石純一(筑波大学准教授)、鈴木緑(スコレ家庭教育振興協会)、佐藤貢悦(筑波大学教授)3名の各パネリストから、この主題に関して、それぞれの専門分野による意見の披瀝と質疑・討議を行った。
- 参加者は、午前・午後の部あわせて258名であった。

### 1. 平成28年度の主な活動概況

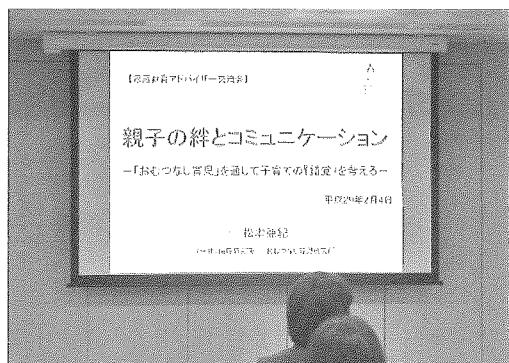
本学会は、1986年の設立以来、家庭教育に関する学問的研究を促進し、実生活における家庭教育の普及や支援者養成を進めている。

平成28年度の主な活動は、

- 第31回大会の開催
- 『家庭教育研究』22号の発行(平成29年3月、依頼論文1編、調査報告論文1編、原著論文1編、研究ノート2篇掲載)
- 『家庭フォーラム』27号発行(28年7月、特集:家庭教育に何ができるか?)
- 会報97号(平成28年4月)、会報98号(平成28年10月)発行
- 家庭教育師資格認定(年3回)
- 家庭教育学構築のためのワーキンググループの研究会(年3回)

- 第1回「父親の育児に関する一考察」
- 第2回「小林一茶の家族観」
- 第3回「ポストドメスティックの思考実験」

- 家庭教育師・家庭教育アドバイザー交流会(平成29年2月、講演「親子の絆とコミュニケーション」および活動報告)
- 常任理事・幹事会(4回)および総会



◆ 家庭教育師:アドバイザー交流会講演



◆ 家庭教育師：アドバイザー交流会

## 2. 日本家庭教育学会第31回大会報告

### (1) 「第31回大会を振り返って」 (中田雅敏会長)

《最も暑い盛り、去る8月20日、日本家庭教育学会第31回大会を開催いたしました。まず、大会に大勢の皆様がご参加くださいましたこと、厚く御礼申し上げます。とりわけ、会場を引き受けてくださった貞静学園短期大学様には、会場の設営や接待、ご案内など細々とご配慮を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

毎年学会にご入会なさって下さる方々が増加し、家庭教育の重要性の認識も広がりを見せております。ご参加くださいました方々で、大会場の講堂には椅子が足りなくなり、教室から急遽運び込むほどの盛況でした。

時程としては午前中には3会場、各会場4本の研究発表があり、合計12本の口頭発表がありました。今までに例のない研究発表の数でした。家庭の在り方、家庭教育の理論、家庭教育の支援の実践、それぞれの角度方向からの取り組みの発表で3会場ともに満席、熱い質疑討議が交わされ、深度ある研究の成果と参加の方々との熱い交流がなされました。

午後からは講演及び全体会が行われ、これもまた会場満席立錐の余地のない盛況でした。ご講演は一般社団法人グローバル教育研究所理事長の渥美育子先生による「グローバル時代の家庭教育」と題して、子供に世界の枠組みを教えようという内容で、拝聴してまさに目から鱗が落ちる、刮目に値する新たな世界観を教示いただきました。

また、全体会は丸山敏秋副会長によるコーディネートで、筑波大学の佐藤貢悦先生と明石純一先生、スコレ家庭教育振興協会の鈴木緑先生の討論も、それぞれの家庭教育にとどまらず、渥美先生のご講演を敷衍する白熱した議論がなされ、また一步家庭教育の考え方、研究と実践法が示され、素晴らしい大会となりました。》



◆ 開会式で挨拶する中田会長

### (2) 個人研究発表

#### ① 育児期にある女性の自立の学びの可能性 — 子育て支援と家庭教育の学びからの検討 —」

河野弓子（名古屋大学大学院博士課程）

[近年の少子高齢化社会において、子育て支援活動が活発に行われている。いわゆる子育て支援は、育児不安のある人たちの育児負担の軽減を基本に進められている。

現在の子育てを取り巻く環境の中で、子育て支援としての育児の学びや「サービス」と、家庭教育としての子どもへのしつけや教育的関わりをどのように捉えていくことができるのかという課題は大きい。子育て支援の充実により育児不安を解消するためのサービスとしての子育て支援のあり方と、家庭教育で求める「子どもと向き合いつつ基本的な生活慣習を整える」ことは、相反するものになりかねない。現代において、この一見矛盾した学びをどう乗り越えていくのかが課題であると考える。】

② 「現代における父親と母親の果たすべき役割 — 家庭の機能低下による子どもへの影響 —」

中西祐子（公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会）

〔男女雇用機会均等法が施行され30年になった。世の中は女性の社会進出がますます進み、活躍できるようになった。その反面、核家族と共に働きにより家族の絆が弱くなっている。また、男女の平等や権利ばかりが主張され、子育てにおいては、家族の機能（父親と母親の役割）が上手く果たされていない現状である。家庭は、外で疲れて帰ってきた家族一人ひとりが疲れを癒やし、明日へのエネルギーを再生する場でなければならない。そこで、男女の違いを認識し、お互いがその役割を果たすための学習と実践が不可欠であると考える。〕

③ 「ITによるつながり社会の中の家庭 — 運命共同体から生活共同体へ」

平林直人（横浜創英大学）

〔IT技術の進歩により、私たちを取り巻く社会環境の変化とともに、人間関係も大きく変化した。家庭・地域・社会の中と外、それらに障壁がなくなり、簡単に個人と個

人がつながる社会になった。SNSの普及によって相手に簡単につながることはできても、心から人を信ずることができず、友情や恋愛関係も希薄になる、こうした社会が到来了。本発表は、このような時代において、人間とは何か、いかに生きるべきかという倫理観を教えるという、親の役割、家庭教育の大切さをもう一度考えてみようとするものである。〕

④ 「児童養護施設における支援活動の報告 — 家族再統合を目指して —」

池田信子（静岡理工科大学浜松情報専門学校こども保育科）

〔近年、虐待など家庭環境上の理由で児童養護施設に入所する子どもの割合が急増した。その中でも処遇困難児や軽度の知的障害、発達障害児の入所が増え、日常生活の支援・指導をしている職員の対応や職務は複雑化し精神的負担が増大している。それが不十分な支援になり、ひいては子どもたちは愛情が満たされず、問題が多発するという負のスパイラルに陥っている。このような現状を踏まえ、児童養護施設A園に対し行っている総合支援セラピー事業の報告を行った。支援の対象は、子ども、職員、保護者であり、それぞれに初期・中期・長期の目標は異なるが、最終目標を共通化し



◆ 個人研究発表の様子

「家族再統合（虐待の再発防止）」としていることを明らかにした。】

⑤ 「家庭は心の癒しの場 — 共感の愛が家族の絆を深める —」

山田 薫（公益社団法人スコーレ家庭教育振興協会）

〔子どもの成長には親との共感の愛が重要である。それによって、子どもは自己肯定感、自尊感情の心を育てていく。それは人間として生きていくための心の土台となる。どんなことがあっても受け入れてくれる家族がいる。帰る居場所がある。この安心感、生きていくための自信を与えてくれる場、これが本来の家庭のあるべき姿なのである。〕

⑥ 「民間企業とのコラボレーションによる家庭教育の普及 — [イキイキ子育てセミナー] の実践より —」

鶴部せつこ 他4名  
(日本家庭教育学会知多支部)

〔私たちは2年ほど前から、子育てに悩む保護者や、家庭教育に興味を持っている保護者を対象に、より専門的な立場から家庭教育について具体的で実践的なアドバイスをもらえる場を提供している。本発表は「イキイキ子育てセミナー」(2015年10回)を通した活動報告である。この取り組みを通して、どの保護者も、子どものよき成長を願って育てているにもかかわらず、保護者の不安や焦りから子どもへの願いや要求が強くなりすぎ、子どもとの関係に不安を抱いている保護者が多いように感じる。しかし、この会に参加した後の保護者の様子をみると、家庭教育の知識を学び、日頃の悩みや不安を話すことによって、自分の行動や心の持ち方を反省し、不安を解消できたというケースも増えたという結果を得て

いる。私たちは、今後も家庭教育の大切さを伝え、よりよい親子関係が築いていけるように身近なところで連携し合い支援し続けていきたいと考える。】

⑦ 「PTA活動が保護者のソーシャル・キャピタル醸成に及ぼす影響」

稲木隆一／扇原 淳（早稲田大学大学院）

〔本研究は、PTA活動がもたらす保護者のソーシャル・キャピタル醸成のメカニズムとその効用を明らかにすることを目的とするものである。埼玉県のA小学校PTA役員9名を対象として、各人に60分程度の半構造化面接を実施した。分析方法には、複線径路、等至性モデルを用いた。結果として、PTA活動における保護者のSC醸成は、「保護者同士のSC」「保護者と学校SC」「保護者と地域SC」「保護者と家庭SC」の4つに分類できた。そして、保護者が「子どもの友人の親を知っている」ことで、子どもの学業成績向上や問題行動抑制など様々な教育効果にPTA活動が貢献している可能性が読み取れた。〕

⑧ 「いじめ問題への地方公共団体の取組みに関する若干の考察」

西中研二（筑波大学国際日本研究専攻シニアフェロー）

〔2013年6月「いじめ防止対策推進法」が成立した。本発表においては、この法と、文部科学省の「平成26年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」および教育委員会の聞き取り調査をベースに、教育行政のいじめ防止対策について概観した。その結果、学校当局は「学級担任」や「学級担任外教諭」「保護者家族」「友人やその保護者」「地域住民や諸機関」から「アンケート調査」「面接・面談」「消

極的・積極的相談」などの諸手段を通して、いじめ情報の収集に努力していることが明らかになったが、そのいじめ情報の共有化については、若干の問題があることも判明した。】



◆ 個人研究発表の様子

#### ⑨ 「赤ちゃんと高校生のふれあい体験授業」

村松葉子（日本家庭教育学会東海支部）

〔高度経済成長期以後、人間関係が希薄化し、人と人がつながっていない現代において、自分の子どもを持ってはじめて赤ちゃんを抱いたという声を聞くのも珍しくない。筆者の所属するNPO法人ママの働き方応援隊では、豊橋市S高校において、赤ちゃんとのふれあい体験授業を行い、調査を実施し、391名の生徒から回答を得た。〕

ふれあい体験前後で赤ちゃんに対するイメージは変化したのかについて、体験後も変化なしの生徒が約5割おり、活動上の課題が浮き彫りとなった。一方、赤ちゃんがより好きになったという生徒が約8割おり、ポジティブな変化が認められた。〕

#### ⑩ 「保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートの可能性」

柏まり／佐藤和順（岡山県立大学）

〔本研究は、子育て家庭の実情と課題に

ついて顕在化する過程から、保育施設を拠点とした育児ソーシャル・サポートの可能性について検討することを目的として、全国の未就学の子どもを持つ親（1133名）を対象に質問紙調査を実施し、それを分析したものである。〕

そのアンケートから、保育施設における育児ソーシャル・サポートが親の子育て意識の改善に有用であることが分かり、保育施設が地域の子育て支援拠点としての役割機能を果たすことにより、夫婦の子育て意識の共有や子育て仲間作りの場となり、子育て家庭の自助・共助機能を高め、子育ての健全化を推進する一助にもなると考えられる。〕

#### ⑪ 「乳児家庭に対する支援のあり方についての一考察 — 0, 1歳児保育所入所家庭を中心に —」

齋藤惠子（貞静学園短期大学）

〔現在、わが国では待機児童問題が深刻化している。加えて、家庭教育力の低下が懸念されている。そこで、本研究は保育所に通う、0, 1歳児の母親にアンケートを実施し、母親の意識の把握と今後の支援の在り方を検討することを目的としたものである。結果、保育所入所の母親は子どもを大切に思い、保育所の関係も良好で仕事を辞めたいと思う一方で仕事を続けることが将来をよりよくすることに繋がっていると考えている。仕事と子育てに揺れ動く母親の姿がうかがえた。そのために、地域や職場での子育て世代のコミュニティー作りや家庭教育アドバイザーとの交流の推進、関係者が互いに今を生きる家庭教育の在り方も含め対話する機会が、今後求められる支援の在り方ではないかと考えた。〕

## ⑫ 「システムズ・アプローチにおける＜家庭の問題児＞のとらえ方」

山本智也（大阪成蹊大学）

〔本発表は家族療法の基礎となるシステムズ・アプローチの考え方をもとに、家庭教育に関わるものとして、具体的な事例をとらえるために大切にしたい視点を提示したものである。このシステムズ・アプローチは関係性、相互作用に着目する円環的認識論を基本としている。これによると、「家庭の問題児」は「家庭の／問題児」ではなく、「家庭の問題／児」ととらえることができる。しかし、ここで注意したいのは、家族をとらえる上で、その家族と家族外システム（地域システム、学校システムなど）との相互作用、関係性をとらえていく視点を忘れてはならないことである。このことを踏まえて、家族とともに健康な面に目を向け、家族の中にすでに持っている問題解決能力を引き出していくことが、家庭教育を支援していく上で重要であるとした。〕

## （3）全体会

### ① 講演「グローバル時代の家庭教育」

渥美育子 氏

（一般社団法人グローバル教育研究所理事長）

〔世界はインターナショナルからグロー



◆ 渥美氏の講演

バル時代に変わった。我々が目指すのは、グローバリストではなくグローバル人材である。

80年代世界を席巻した国際化時代は国家間同士の関わりが主流であったが、90年代に入り次第にグローバル時代に移行した。ところが日本は、バブルが崩壊した後の失われた20年に苦しんでおり、出遅れた。グローバル時代ではそれまでと異なり、地球まるごと、世界全体から俯瞰して自分の立ち位置を見つけなくてはならない。そのような地球規模に意識を拡大させるためには、さらに異なる価値観を持つ人々と付き合っていくためには、日本固有の価値観と世界の多様性を受容するベストミックスのバランスが問われる。

つまり、グローバル教育とは、日本の価値観を持ちつつ、世界と繋がっていけるグローバル人材を育成することになる。これがグローバル時代の家庭教育である。〕

### ② パネルディスカッション

丸山敏秋（一般社団法人倫理研究所）

明石純一（筑波大学）

鈴木 緑（スコレ家庭教育振興協会）

佐藤貢悦（筑波大学） 以上の各氏による。



◆ パネルディスカッションの様子

文責：嚴錫仁（日本家庭教育学会事務局長）